

大学ダンス授業における鏡の利用が 動作習得に関する自己評価に及ぼす影響

菅家沙由梨・河野 由・金子伊樹
新井淑弘・浅井泰詞

群馬大学教育実践研究 別刷
第37号 141～147頁 2020

群馬大学教育学部 附属学校教育臨床総合センター

大学ダンス授業における鏡の利用が 動作習得に関する自己評価に及ぼす影響

菅 家 沙由梨¹⁾・河 野 由²⁾・金 子 伊 樹³⁾
新 井 淑 弘⁴⁾・浅 井 泰 詞⁵⁾

1) 目白大学短期大学部歯科衛生学科

2) お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科

3) 目白大学短期大学部ビジネス社会学科

4) 群馬大学教育学部保健体育講座

5) 武蔵野美術大学身体運動文化研究室

The influence of the use of mirror in the university dance class on the self-assessment about movement acquisition

Sayuri KANKE¹⁾, Yui KAWANO²⁾, Yoshiki KANEKO³⁾
Yoshihiro ARAI⁴⁾, Taishi ASAI⁵⁾

1) Department of Dental Hygiene, Mejiro University College

2) Graduate School of Humanities and Sciences, Ochanomizu University

3) Department of Business Studies, Mejiro University College

4) Department of Health and Sport Sciences, Faculty of Education, Gunma University

5) Department of Health, Sports and Physical Arts, Musashino Art University

キーワード：ダンス、鏡、動作習得、自己評価、大学体育

Keywords : Dance, Mirror, Movements acquisition, Self-assessment, University physical education

(2019年10月31日受理)

要 旨

本研究は、ダンス授業における鏡の利用の有無が動作習得に及ぼす影響について、エアロビクスダンス実施後の自己評価から比較・検討した。対象は、東京都内私立大学に所属する一般教養体育のダンス授業の受講者18名とし、ビデオで自身の動きを見る前「自身の動きの感覚」の自己評価と、ビデオで自身の動きを見た後「先生との比較」の自己評価および「ダンスの授業では鏡を利用した方が良いと思うか」についてのアンケート調査を行った。調査の結果、「自身の動きの感覚」についての自己評価においては、鏡の有無によつての自己評価に有意な差は認められなかったが、「先生との比較」についての自己評価において、鏡ありの自己評価が有意に高い結果を示した。これらのことから、動きやすさや振りの真似のしやすさ、さらに鏡利用の有無についてのメリット・デメリットをふまえても、ダンス授業において鏡を利用することは、ダンスの動作習得に有効である可能性が示唆された。

1. 諸言

教育現場のダンスは、平成20年度の中学校学習指導要領の改定により、中学1・2年生の保健体育で必修となった。そこで示されたダンスの実施内容は「創作ダンス」、「フォークダンス」、「現代的なリズムのダンス」の3種類となっており、学習指導要領ではダンスの目標を「感じを込めて踊ったりみんなで踊ったりする楽しさや喜びを味わい、ダンスの特性や由来、表現の仕方、その運動に関連して高まる体力などを理解するとともに、イメージを捉えた表現や踊りを通じた交流をすること。」と定めている（文部科学省，2018）。このダンスの教育目標を達成していくためには、ダンス授業の教育内容の明確化や、授業環境の整備、また授業担当教員の知識および指導力の向上など、ダンス授業における質的向上が求められるであろう。しかし、そのような中でもダンスの指導に対して不安を抱えている体育教員が多くいるのが現状である。滝沢ら（2018）の中学校体育教員の意識による調査研究によると、「ダンス、武道を指導する力がない」と答える教員が多く、授業を行う上で自分が模範を示せない種目の運動を教えることについて困惑している教員が多く存在することが報告されている。また、山口ら（2018）の体育教員のダンス指導不安の研究によると、不安要素には「生徒の授業参加や動機づけ、授業構成に対する不安（第1因子）」「教員自身の知識に対する不安（第2因子）」「教員自身のダンス技術に対する不安（第3因子）」「生徒のレベルやニーズに対する不安（第4因子）」があると報告されており、第3因子、第4因子はダンス指導経験による不安の抱き方の差はないが、第1因子、第2因子は、ダンス指導の経験がないことによって増大することから、教員歴というよりもダンス指導経験がダンス指導不安に影響を及ぼすことが明らかとなっている。

しかしながら、ダンスを専門種目とする体育教員は少なく、ダンス未経験であっても教育現場では指導をしていかなければならない。文部科学省は、初めてダンスを指導する教員に向けて「ダンス指導のためのリーフレット（文部科学省，2007）」を発行し、指導のポイントを紹介している。その他に、ダンス指導の研修会等も開催されているが、多くの教員が指導力不足を感じながらも日々の業務で多忙のため、指導法

研修・教材研究を実施している教員は少なく（中村，2009a）、ダンス指導の不安感があまり緩和されていないのが現状と言える。

そのような中で、今後ダンス指導の質的向上を目指していくためには、教員養成課程の大学において、学生のダンスに対する不安を少しでも軽減し、実際の教育現場に貢献していくことが重要である。中村（2009b）の中学校ダンスの男女必修化の課題についての調査によると、教員養成課程の大学では、教育現場のニーズに合わせた教員養成が必然であると述べられている。また、現職教員の研修がままならない状況においては、教員養成課程のカリキュラム改正や指導力養成が指導力不足解決の一躍を担うと考えられることから（中村，2009a）、教員養成校におけるダンス教育が、体育教員のダンス指導力向上において重要となってくる。教員養成課程におけるダンス授業についての先行研究によると、ダンス経験がなく、ダンスやダンス指導に対してネガティブな認識を持っている学生が多く、ダンス指導法について学ばせる前に、ダンスの楽しさを経験させ、ポジティブな認識を持つように仕向けることが、今後ダンス指導に積極的に取り組む姿勢を築くことができると報告されている（朴，2016）。また、授業に対する印象と学習意欲の変容に関する研究では、学習意欲を高めるために、授業初回から数回のうちに基礎的な技術を習得させ、「踊ることができる」ことを受講生に認めさせることと、受講生が描いている「難しいダンス」のイメージを変革させることが必要であることが報告されている（川瀬，2018）。このことから、ダンスの楽しさを経験し理解させることはもちろんのこと、まず基礎的な技術を習得させることが重要であり、それが不安要素の改善に繋がるのではないかと考えられる。学生自身がダンスの動作習得ができていると実感することで、ダンスに対する意識が変化していく可能性がある。そのためにも、教員養成を行う大学のダンス授業においては、学生がより多くの動作を習得していけるような指導方法および授業展開をしていかなければならない。

ダンスなどの課題動作習得時には、学習者が示範者の動作を見ながら行なうのが通例となっている。ダンススタジオでのレッスンなどでは、示範者の動きと鏡に映った自分の動きを、交互に比較・確認しながら、動作を模倣していくのが一般的である（長澤

ら、2016)。また、表現スポーツを専門とする者の多くは、練習時に鏡を利用し自身の動作を確認することで技能習得、技術向上を目指していると考えられる。このように、ダンスや表現スポーツ経験者は、鏡を利用して動作習得を行っている傾向にある。長澤ら(2016)のダンスの動作習得時における鏡の利用と視線についての研究によると、ダンスの指導場面において、鏡を利用することは、前後左右の基準ができ、動作の理解を早めることに有効であることが報告されている。一方、バレエの指導において、鏡の利用がバレエダンサーの技能習得に悪影響を及ぼす可能性があるという報告もあり(Radell Sally A et al., 2002; Radell Sally A et al., 2003)、必ずしも鏡を利用することが動作習得に有効であるとは限らない。そのような中で、大学ダンス授業での鏡利用の有無について、学生自身の意識調査はあまり行われていない。

そこで本研究では、大学ダンス授業において、ダンスの中でも基本ステップ動作の習得をメインとしているエアロビクスダンスを実施した学生を対象に、自身の動作習得に関するアンケート調査を行い、鏡利用の有無それぞれの自己評価の差を比較し、鏡の有無がダンス授業を受講する学生の動作習得にどのような影響を及ぼすのかを検討することを目的とした。

2. 方法

(1) 調査対象および調査期間

東京都内私立大学に所属する教員免許取得予定の学生で、一般教養体育のダンス授業を受講し、研究の同意が得られた18名を対象としてアンケート調査を行い、調査用紙の回収数は18部(回収率100%)、そのうち有効回答数は16部(88.9%)であった。対象者の年齢は、 19.25 ± 0.77 歳であり、全員女性であった。また、ダンス経験ありが全体の37.5%、なしが62.5%であり、ダンス経験がある学生のダンス歴は、 7.33 ± 4.68 年であった。調査は2018年5月に実施した。

(2) 調査内容および分析方法

エアロビクスダンス実施時に鏡を利用した場合と利用しない場合の自身の動作習得に関する自己評価を、独自に作成した自己記入式質問紙を用いて調査した。エアロビクスダンス実施時は、指導者は学生に背を向

け、学生と同じ方向を見て示範した。また、ビデオカメラで学生の動きを後方から撮影し、後から自身の動きと指導者の動きを比較・確認できるようにした。自己評価については、ビデオで自身の動きを見る前「自身の動きの感覚」の自己評価と、ビデオで自身の動きを見た後「先生との比較」の自己評価の回答を得た。

質問内容は、「腕の高さや脚の出す方向が合っているか」や「リズムに合わせて動いているか」など動きの正確性に関する質問や、「楽しく動くことができたか」や「体を大きく動かすことができたか」など学生自身の満足度に関する質問、さらに「ダンスの授業では鏡を利用した方が良いと思うか」の内容を質問項目として作成した。また、鏡利用の有無についてどちらが動きやすかったのか、どちらが振りを真似しやすかったのか、鏡の有無のメリット・デメリットについて自由記述にて回答を得た。

アンケート調査の回答は「そう思う」「まあまあ思う」「あまり思わない」「まったく思わない」の4件法にて評価してもらった。また、鏡を用いた場合と用いない場合の自己評価の差の検討には、アンケートの回答を「そう思う」4点、「まあまあ思う」3点、「あまり思わない」2点、「まったく思わない」1点と点数化し、対応のあるt検定を用いて分析した。有意水準は5%未満とした。

(3) 倫理的配慮

調査は無記名で行い、調査実施時に、調査目的、利用方法、回答は強制でないことを学生に説明し、参加・不参加は自由であること、不参加であっても成績などへの影響はないことを説明した。その後、質問紙を配布し、研究に同意した者のみ、授業後、教室外に設置した回収箱に提出してもらった。

3. 結果

(1) 鏡の利用有無の比較

エアロビクスダンス実施後に行った自身の動作習得に関する自己評価を、鏡利用の有無で質問項目ごとに比較した。その結果、ビデオで自身の動きを見る前の「自身の動きの感覚」についての自己評価においては、鏡の有無によっての自己評価に有意な差は認められなかった(表1)。また、ビデオを見た後の「自身

表1 質問項目および点数

質問項目	鏡あり	鏡なし		
	mean±SD	mean±SD		
ビデオを見る前 (動きの感覚)	①先生と同じ腕の動きができていたと思うか	2.81±0.54	2.69±0.48	n.s.
	②先生と同じステップの踏み方(脚の動かし方)ができていたと思うか	2.88±0.72	2.75±0.58	n.s.
	③リズムに合わせて動けていたと思うか	3.06±0.57	2.88±0.62	n.s.
	④大きく体を動かすことができたか	3.13±0.62	2.81±0.66	n.s.
	⑤楽しく動くことができたか	3.56±0.63	3.31±0.70	n.s.
	⑥先生の動きにより近づく意識を持って動けたか	3.19±0.54	3.13±0.62	n.s.
ビデオとを見た比較後 (先生との比較)	①同じ腕の動きができていたか	3.06±0.44	2.69±0.70	*
	②腕の高さが合っていたか	3.06±0.25	2.50±0.73	**
	③脚の出す方向は合っていたか	3.00±0.63	2.81±0.75	n.s.
	④ステップの踏み方(脚の動かし方)は合っていたか	3.25±0.58	2.69±0.79	*
	⑤リズムは合っていたか	3.44±0.51	3.00±0.73	*
	⑥体を大きく動かすことは出来ていたか	3.25±0.45	2.63±0.81	**
	⑦振りを覚えることはできたか	3.13±0.72	2.88±0.89	n.s.

*: p < 0.05, **: p < 0.01

の動きと先生の動きとの比較」についての自己評価では、「同じ腕の動きができていたか」、「腕の高さが合っていたか」、「ステップの踏み方(脚の動かし方)は合っていたか」、「リズムは合っていたか」、「体を大きく動かすことは出来ていたか」の質問項目において、鏡ありの自己評価が有意に高い結果を示した(表1)。

(2) 鏡利用の有効性

「鏡あり、鏡なしではどちらが動きやすかったか」の質問において、調査対象者全員が鏡ありの方が動きやすいと答えた(図1)。その理由として、「自分の動きを確認できるから」、「前から見た先生の動きが分かるから」、「隣との間隔が分かりやすいから」、「先生と自分自身を比べて直すことができるから」、「自分の動きが見えた方が踊りやすいから」などがあげられた。

「鏡あり、鏡なしではどちらが振りを真似しやすかったか」の質問においても、鏡ありの方が指導者の振りの真似をしやすいという回答が多かった(図1)。その理由は、「自分と先生の姿を比べられるから」、「先生の正面からの動きも鏡を通して見ることができるから」、「前後左右の人の動きもみえて、自分の

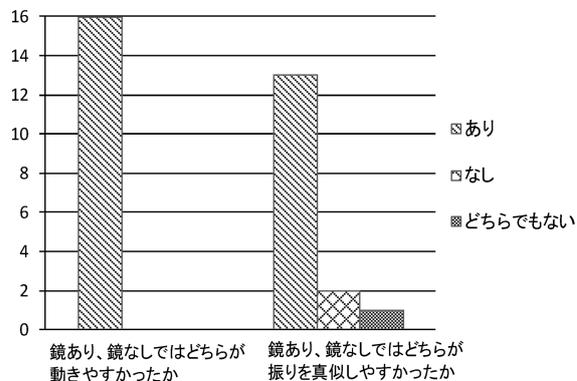


図1 鏡の活用についての比較

動きを確認できるから」、「細かい事まで目に入るから」、「人との距離が分かるから(大きく動ける)」などがあげられた。また、どちらでもないと答えた学生の理由は、「ずっと先生の後ろ姿を見ていたから、鏡の有無に関しては気にならなかった」という回答であった。

(3) 鏡の利用有無に対するメリット・デメリット

エアロビクスダンス実施時に鏡の利用について、鏡を利用する場合および利用しない場合それぞれのメ

リット・デメリットを自由記述で調査した結果、鏡ありのメリットとして、「自分の動きを見ながら確認できる」、「先生と自身の踊りを比較できたので修正できた」、「動きが合っているか確認できる」の意見が多く、その他に「自分の立っている位置がつかみやすいので、大きく動ける」、「自分の動きや他人の動きを見ることができる」、「鏡越しの先生の動きがわかる」、「姿勢も気にするようになる」などの意見があげられた。鏡ありのデメリットとしては、「みんなに見られている感じがして少し恥ずかしい」、「先生の振りに集中せず周りを見てしまう」の意見が多く、その他に「他の人と比べてしまう」、「先生を見たり鏡を見たり忙しい」、「鏡にとらわれ過ぎる」などの意見があげられた。

鏡なしのメリットとして、「自分の姿を見て確認できない分、先生の動きをしっかりと見て動きを近づけようと意識できた」、「人の目が気にならないから恥ずかしくない」の意見が多く、その他に「他人と比べず大きく踊れる気がする」、「集中できた」、「自分で考えて踊るようになる」などの意見があげられた。鏡なしのデメリットとしては、「自分の動きが良くわからないから直せない」の意見がほとんどであり、その他に「自分の動きが分からないから自信が持てない」、「人との距離感がつかめない」、「人とかぶらないようにしないと先生が見えない」などがあげられた。

(4) 大学ダンス授業における鏡の利用について

鏡利用の有無に関するメリット・デメリットをふまえた上で「ダンスの授業では鏡を利用した方が良いと思いますか」の質問において、調査対象者全員が鏡は利用した方が良いと答えた。

4. 考察

(1) 鏡の有無が動作習得に与える影響

エアロビクスダンス実施後に行った自身の動作習得に関する自己評価を、鏡利用の有無で比較した結果、ビデオで自身の動きを見る前の「自身の動きの感覚」に関する自己評価においては、鏡の有無によっての自己評価に有意な差は認められなかったが、ビデオを見た後の「自身の動きと先生の動きとの比較」に関する自己評価において、いくつかの質問項目に鏡ありの自

己評価が有意に高い結果を示した。この結果から、実際に動いている時の感覚としては、鏡の利用の有無による影響はなく、学生自身が動きの習得ができていているという自己評価を得ることは鏡の利用有無に影響されないと言えるであろう。しかし、自身の動きと教員の動きとの比較をした結果、鏡を利用することで動作習得の自己評価が上がっていた。このことから、鏡を利用したことによって、より正しく動作を習得することができたと考えられ、鏡の利用が動作習得に与える影響があり、動作習得には鏡を利用することが有効であると推察される。

「自身の動きと先生の動きとの比較」において有意に高い結果を示した質問項目は、「同じ腕の動きができていたか」、「腕の高さが合っていたか」、「ステップの踏み方（脚の動かし方）は合っていたか」、「リズムは合っていたか」、「体を大きく動かすことは出来ていたか」となっており、ほとんどが動きの正確性に関する項目となっていた。ゆえに、鏡があることで、学生自身が指導者と自分の動きの違いに気付き、自身の動きの修正をしている可能性が考えられる。先行研究においても、鏡を見ながらダンスを行うことは動きのエラーに早く気づき、動作習得をスムーズに行い、バランスのとれた動きでリズムをとるために非常に有効である（長澤ら、2016）と報告されていることから、鏡を利用することは正しい動作を習得することに有効である。高野（2013）は、舞踊運動の習得過程での鏡の利用について、始めは示範や鏡に映る示範の像を漏れなく取り入れながら、徐々に鏡に映る自分の像と示範の像を比較する作業へ移行し、終盤では鏡や示範をわずかに視野に入れながら、自分が主体的に踊れるようになるべく示範や鏡を見ないというような、段階を踏んだ鏡の利用の姿勢が伺えた、と述べており、本研究対象者である学生も、鏡に映る自分の姿と示範をした指導者との動きの比較を、鏡を通して実践できていたのではないかと考えられた。

本研究は、学生の自己評価から動作習得ができていているかを判断した為、それがダンス動作の本質をとらえた習得に繋がっているかは定かではない。しかし、鏡を利用することにより、学生自身が自分の動きと指導者の動きの違いを意識してエアロビクスダンスを実施していた可能性があることから、ダンス授業において鏡を利用することは、自身の動きに対する意識を高め

る効果が期待できる。

(2) ダンス授業における鏡の有効性

鏡の利用の有無に関して、動きやすさおよび振りの真似のしやすさについて、鏡ありの方が良いと答えた学生が多い結果となった。それらに加え、鏡ありのメリットにおいて、自由記述では「自分の動きを見ながら確認できる」、「先生と自身の踊りを比較できたので修正できた」、「動きが合っているか確認できる」などがあげられ、鏡を利用することで、正しく動作が習得できるという意見が多くあげられた。また、鏡なしのデメリットにおいても、「自分の動きが良くわからないから直せない」、「自身の動きが分からないため自信がもてない」などの意見があったことから、学生はダンス授業において、自身の出来栄を気にしていることが窺える。川瀬(2013)は、受講生が基礎的なダンスの技術を習得することにより、ダンスを楽しいと意識することができ、その後のダンスに対する関心・意欲の向上に繋がると述べている。また、和光ら(2018)によると、単純な動きやすぐ真似ることの出来る動きを習得することで、ダンスに対する抵抗感を取り除き、自信や向上意欲を持つことが重要であると述べられている。本研究の結果において、学生は正確性に関する質問項目に有意な差が認められたことから、「自分はダンスができているのか」という点に目が向けられていることが見て取れる。「ダンスができてい」と実感することで、関心・意欲の向上に繋がる可能性を考えると、鏡を利用することはダンスに対する意識を上げていくための後押しになるのではないかと考えられる。

鏡なしのメリットにおいて、「自分の姿を見て確認できない分、先生の動きをしっかりと見て動きを近づけようと意識できた」、「人の目が気にならないから恥ずかしくない」などの意見が多く、その他に「他人と比べず大きく踊れる気がする」、「集中できた」などがあげられた。また、鏡ありのデメリットにおいて、「みんなに見られている感じがして少し恥ずかしい」、「先生の振りに集中せず周りを見てしまう」、「他の人と比べてしまう」などの意見があり、人目を気にせずに自由に楽しく踊るためには鏡を利用しない方が良い場合もあると考えられる。鏡を見ることで、自身の動作ができるできないに影響されてしまうことを考えると、

鏡はその授業の目的に応じて使い分けていくことが重要であると考えられる。動作習得には鏡の利用は有効であるが、動きの出来栄えに関係なく自由にのびのびと楽しむことを目的とするダンスの授業内容の場合には、鏡の利用が学生のダンスに対する意識に悪影響を及ぼす可能性も考えられる。その点を考慮して授業内容および指導方法を考えていくことが今後のダンス授業の課題となってくる。

5. まとめ

大学ダンス授業において、ダンスの中でも基本ステップ動作の習得をメインとしているエアロビクスダンスを実施した学生を対象に、鏡の有無がダンス授業を受講する学生の動作習得にどのような影響を及ぼすのかを、学生の自己評価から比較検討した。

その結果、ビデオで自身の動きを見る前の「自身の動きの感覚」についての自己評価においては、鏡の有無によつての自己評価に有意な差は認められなかったが、ビデオを見た後の「自身の動きと先生の動きとの比較」についての自己評価において、鏡ありの自己評価が有意に高い結果を示した。これらのことから、動きやすさや振りの真似のしやすさ、鏡利用の有無についてのメリット・デメリットをふまえても、ダンス授業において鏡を利用することは、ダンスの動作習得に有効であることが示唆された。

6. 今後の課題

本研究は、鏡利用の有効性の一端を明らかにしたのみであり、多くの課題や限界がある。対象者数の少なさや限定された教員の授業だけでなく、複数のダンス授業で再度検討することが必要だと考えられる。また、本研究では鏡の利用有無の有効性について、動作習得の自己評価に焦点を当てて検討した。よつて、授業内容別における鏡の有効性は検討していない。今後はそれらをふまえた検討が必要であると考えられる。

参考文献

文部科学省(2018)「中学校学習指導要領(平成29年告示)解説」、『株式会社東山書房』, p168.
滝沢洋平・針谷美智子・和田博史・松本健太・伊藤雅広・片桐

- 正広・歌川好夫・白旗和也・近藤智靖 (2018) 「東京都世田谷区並びに横浜市青葉区の中学校保健体育科の教師の意識に関する調査研究—保健体育科の授業, 部活動, 教育実習, 生徒指導に着目して—」, 『日本体育大学紀要』, Vol.48, pp.45-59.
- 山口莉奈・正田悠・鈴木紀子・阪田真己子 (2017) 「体育科教員のダンス指導不安の探索的研究」, 『日本教育工学会論文誌』, Vol.41, no.2, pp.125-135.
- 文部科学省 (2007) 「新学習指導要領に基づく中学校向け「ダンス」リーフレット」
http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/jyujitsu/1306098.htm
(2019/5/24)
- 中村恭子 (2009) 「中学校体育の男女必修化に伴うダンス授業の変容—平成19年度, 20年度, 21年度および24年度の年次推移から—」, 『日本女子体育連盟学術研究』, Vol.26, pp.1-16.
- 中村恭子 (2009) 「中学校ダンスの男女必修化の課題—中学校教員を対象とした調査にもとづいて—」, 『順天堂スポーツ健康科学研究』, Vol.13, pp.27-39.
- 朴京眞 (2016) 「教員養成課程におけるダンス授業のあり方に関する一考察: T大学の「ダンス実技」の授業を事例に」, 『筑波大学体育系紀要』, Vol.39, pp.61-70.
- 川瀬雅 (2018) 「ダンスの授業に対する印象と学習意欲の変容: I大学の授業を事例にして」, 『環太平洋大学研究紀要』, Vol.13, pp.9-15.
- 長澤郁子・竹俣壽郎・稲垣治之・梶山廣司 (2016) 「ダンス授業の指導に関する一考察—動作習得時における鏡の利用と視線について—」, 『人間科学研究』, Vol.13, pp.74-85.
- Radell Sally A・Adame Daniel D・Cole Steven P(2002) 「Effect of teaching with mirrors on body image and locus of control in women college ballet dancers.」, 『Perceptual and motor skills』, Vol.95, pp.1239-1247.
- Radell Sally A・Adame Daniel D・Cole Stephen P(2003) 「Effect of teaching with mirrors on ballet dance performance.」, 『Perceptual and motor skills』, Vol.97, pp.960-964.
- 高野美和子 (2013) 「経験の違いから捉えた舞踊運動の習得過程に関する研究—舞踊運動習得の初期段階に着目して—」, 『日本女子体育大学紀要』, Vol.43, pp.51-58.
- 和光理奈・真寄雅子 (2018) 「小・中学校教員のダンス授業と苦手意識の考察」, 『中京大学体育研究所紀要』, Vol.32, pp.13-18.
- 長澤郁子・竹俣壽郎・稲垣治之・梶山廣司 (2014) 「ダンス授業の指導に関する一考察—ビデオ再生方法の効果について—」, 『人間科学研究』, Vol.11, pp.76-85.

(かんけ さゆり・かわの ゆい・かねこ よしき・
あらい よしひろ・あさい たいし)

